

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	樹保育園
法人名	NPO法人すぎなみ子育てひろばchouchou
法人所在地	東京都杉並区上荻3-22-13

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音の表現～あそびの中から音を感じて音を出す～

2歳クラスで、一年を通して、自然物に触れたり、季節の行事に参加する中で、身の周りにある「音」を表現することを楽しみ、「音」への関心を深め、興味を持つようにした。

①音を感じて擬音語（例；雨のザーザー）や擬態語（例；シーンとしている）を表現することの楽しさを探すプロセスを大切にした。

②道具を使って音を出す楽しさを探すプロセスを大切にした。

<テーマの設定理由>

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

6月の雨の日、雨の音をテラスに出て聴いてみた。その時、高月齢児はことばで雨の音がどんなだったか表現していた。低月齢児はことばの発達が未熟で、ことばでの表現が難しかった。しかし、「雨の音」という何かを子どもたち一人ひとりが感じ取っている様子があったので、一年近くかけて自然界の音やあそび・生活の中の音を子ども自身の自由な発想で表現していくことを保育者と一緒に探究していくことにした。園の特色として、幼児クラスに進級すると楽器に触れる機会がある。2歳クラスでは音を表現し、楽しむ機会を保育の環境構成や活動内容にとり入れ、音の表現を探究することにした。

2. 活動スケジュール

導入（6月）：雨の音をテラスで聴き、雨の音を表現

夏（7月-8月）：水遊びやプールで水の音を表現（擬音語）、
感触遊び（絵の具、氷、寒天、片栗粉）の経験を表現（擬態語）

秋（9月-11月）：秋の散歩（落ち葉やどんぐりの音）秋祭りのおみこしの音、
年長組のエイサー踊りのパーラン（太鼓）の音

冬（12月-2月）：「あわてんぼうのサンタクロース」の歌、
どんぐりマラカスの製作、
「あぶくたったにえたった」で「とんとんとん」「何の音？」に答える、
ノントンの絵本から擬音語と擬態語に触れる

春（3月）：身の周りの物（ペットボトル、プリンカップ、輪ゴム、びん、木の実）を
使って自由に音を出す、
どんぐりマラカスで「おもちゃのチャチャチャ」「かえるのうた」に合わせて音を出す、
雨の音をテラスで聴き擬音語表現（再び）

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

・準備した素材や道具

夏：水遊び、プール、感触遊び（絵の具、氷、寒天、片栗粉）

秋：自然豊かな原っぱ公園に週2回散歩に出かける、落ち葉遊び、どんぐり拾い、川の音、光の向き

冬：どんぐりマラカスの製作、あわてんぼうのサンタクロースの歌詞内容のイラスト、
ノントンの絵本

春：ペットボトル、ペットボトルキャップ、びん、プリンカップ、輪ゴム、空き箱、木の実

・保育者は子どもに「どんな音がするかな？」と問いかけ、子どもからの自由な表現を待ち、見守る。表現が出てこないときもあるが、その場合は次の機会に継続して問いかける。

・記録にはメモ、スマホのカメラを利用した。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

6月：雨の音をテラスに出て聴いた。

保育者：「どんな音がしたかな？」

子ども：（弱い雨の日）しとしと、さーさー、（強い雨の日）ザーザー、ぽつぽつ

高月齢児はことばで雨の音がどんなだったか表現していた。低月齢児はことばの発達が未熟で、ことばでの表現が難しかった。しかし、「雨の音」という何かを子どもたち一人ひとりが感じ取っている様子があったので、音をことばで表現するにはことばの発達が進む後期に取り組むのがよく、前期は自然界の音、特に水の音に触れたり、絵本や紙芝居、手遊びで音を表現したものを取り入れて、様々な経験をするようにし、保育者と一緒に「音の表現」を探究していくことにした。

夏：水遊び、プール、感触遊びの経験

<プールで座りながらバタ足をした後>

保育者：「どんな音がしたかな？」

子ども：「バシャバシャ」「じゃぶじゃぶ」

<水遊びで穴をあけたペットボトルから水がこぼれているとき>

保育者：「どんな音がするかな？」

子ども：「しゃー」「ぽたぽた」「しゃわーしゃわー」

<寒天遊び>

保育者：「どんな感じ？」「どんな音がするかな？」

子ども：「ぐにゅぐにゅ」「べとべと」

・擬態語は擬音語よりもさらに表現することがむずかしかった。

秋：秋の散歩

<落ち葉の道を歩いたとき>

保育者：「どんな音がするかな？」

子ども：「さくさく」「くさくさ」「しゃりしゃり」

<秋の音表現>

・秋祭り：秋祭りでおみこしの後ろを「わっしょいわっしょい」と言いながら練り歩いた経験の後、午睡明けのふとんをたたんで押し入れにしまうとき、友だちと一緒に「わっしょいわっしょい」と言いながらふとんを運んでいた。

・エイサーのパーラン（太鼓）：園庭で遊んでいるとき、2階からエイサーのパーランの音が聞こえてくると、砂場で遊んでいたバケツを裏返し、数名でとんとんとリズムにあわせてたたき姿が見られた。他にも、エイサーのパーラン、カスタネット、トライアングルの音が聞こえてくると「何の音？お祭りの音だ！」とお囃子の音だという子もいた。

・はらっぱ公園で拾ったどんぐりを、どんぐりころころの歌のように、丘の上から下へ転がす遊びが流行った。どんぐりに続いて自分たちも同じように丘の上から下へおしりをつけて下ろうとする遊びや、丘を走って下る遊びが流行った。

冬：擬音語や擬態語を楽しむ

<あわてんぼうのサンタクロースの歌>

子どもたちが楽しみにしているクリスマスに向け、あわてんぼうのサンタクロースの歌を5番まで歌った。歌詞の様子が視覚的にわかるようにイラストを描き、紙芝居のようなものを作成した。りんりんりん、しゃんしゃんしゃん、どんしゃらら等の擬音語の世界に触れ、楽しんだ。クリスマス後も散歩中に友だちと一緒に歌う姿も見られた。

<どんぐりのマラカス作り>

小さめのペットボトル2本を用意し、原っぱ公園でみんなで拾って集めたどんぐりを好きなだけ入れてマラカスを作った。クリスマスの曲に合わせて音を出す計画であったが間に合わず実現しなかった。

<あぶくたつたにえたつた とんとんとん、何の音？>

戸外遊びであぶくたつたにえたつたを楽しんだ。「とんとんとん、何の音？」と聞かれたとき、オニ役の子は、自由に〇〇の音を考えて友だちに伝えた。雨の音、風の音、葉っぱの音、オオカミの音、お化けの音、などがあつた。全員がオニをする機会があるように配慮した。

<ノントンの絵本 擬音語と擬態語の世界に触れる>

擬音語と擬態語表現の多いノントンの絵本が保育室にたくさんそろつた。子どもたちはそれぞれお気に入りの本を手にし、保育者に読んでもらうことを楽しんだ。

春：道具を使って自由に音を出す

<どんぐりマラカスで音を出す>

最初は、自分が作ったマラカスをふり、音が出ることを楽しんだ。次第にどんぐりのたくさん入ったマラカス、少ないマラカスで音を比較する子もいた。保育者が「かえるのうた」「おもちゃのチャチャチャ」を歌うと、子どもたちはそれに合わせて自然とリズムをとり、マラカスを振って音を出していた。

<ペットボトルや輪ゴムで音を出す>

ペットボトルやペットボトルキャップ、箱やプリンカップにつけた輪ゴム、びん、木の実を用意した。自由に使って音を出して遊ぼうと呼びかけ、保育者も一緒に遊んだ。

保育者：「どんな音が出るかな？」

子ども：「見て～！こんな音がするよ！」

自分自身で見つけた音の発見に興奮しながら、友だちや保育者に披露していた。

<雨の音をテラスで聴く～再び～>

保育者：「どんな音がするかな？」

子ども：「じゃーじゃー」「ざんざかざん」

6月とは異なり、子どもたちが全員、我先にと自分が聞こえた音を保育者に伝えてきた。それぞれ自分が聞こえたように自由に表現していた。



写真1. 雨の音をテラスで聴く



写真2. ゴムの音を楽しむ

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

幼児クラスに進級すると本物の楽器に触れる。2歳クラスではその前段階として、子どもたちと一緒に音の世界への関心を広げていった。2歳クラスなら擬音語や擬態語を表現でき、楽しめるだろうと初めに考えていたが、6月の雨をことばで表現することが難しい子がほとんどであることがわかった。子どもたちが音をことばで表現することに興味を持つだろうと大人の頭で勝手に考えてしまったことを反省した。音をことばで表現する楽しさを探究する前に、2歳クラスでは様々な経験をすることで、いろいろな音に触れることが大事だと考えた。いろいろな経験と言語能力の発達が合わさることで、音の表現への興味が広がっていくのだろうと考え直した。子ども自身が面白さを感じることで興味が広がる。3月には音が出る道具を用意して、音との関わりが広がるようにした。自由に、たたいたり、こすったり、吹いたり、はじいたりすることで出てきた音が「自分が発見した音」となり、その発見を友だちや保育者に伝える姿が見られた。音の発見が次々と広がっていく子どもたちの勢いと生き生きとした表情が印象的だった。幼児クラスへの進級後、さらに音の違いを発見したり、自分が発見した「音」が重なり合って合奏になったり、楽器を作ったり、踊ったりする姿が想像できる。これから、2歳クラスの子たちが成長して「音」の探究を続ける姿を追っていきたいと思った。